

令和2年度秋田県水産振興協議会 議事要旨

1 開催日時 令和3年3月23日(火) 13:30～15:15

2 開催場所 アキタパークホテル

3 出席者 【委員】

森田新一郎(八峰町長)

柏崎 潤一(男鹿市長代理:産業建設部長)

土門 保(にかほ市長代理:農林水産建設部長)

加賀谷 弘(秋田県漁業協同組合 代表理事組合長)

船木 律(秋田海区漁業調整委員)

山本 太志(秋田県漁業士会長)

阿部 茂生(株式会社タカヤナギ 生鮮部長)

小玉喜久子(秋田県地域婦人団体連絡協議会会長)

柳原ケイ子(生活協同組合コープあきた 地域理事)

栗盛寿美子(秋田県栄養士会長)

小野 智憲(公募)

高橋 一孝(公募)

【事務局】

阿部 喜孝(水産振興センター所長)

水谷 寿(水産振興センター総務企画室長)

工藤 輝喜(水産漁港課長)

三浦 信昭(水産漁港課 調整・振興班 主幹(兼)班長)

土田 織恵(水産漁港課 調整・振興班 副主幹)

武藤めぐみ(水産漁港課 調整・振興班 主査)

松山大志郎(水産漁港課 調整・振興班 主任)

柳原 陽(水産漁港課 調整・振興班 技師)

斎藤 和敬(水産漁港課 漁業管理班 主幹(兼)班長)

橋本 羊子(水産漁港課 漁業管理班 主査)

渡辺 亮(水産漁港課 漁港漁村整備班 副主幹(兼)班長)

- 4 議 事
- (1) 水産施策に関する意見等への対応方針について
 - (2) 令和2年度主要事業の実施状況について
 - (3) 令和3年度施策・事業の概要について
 - (4) 漁場整備計画について
 - (5) 消費・安全対策交付金事業の事後評価について
 - (6) 規約の改正について

○議事（１）を説明した後の質疑応答・・・質疑なし

○議事（２）を説明した後の質疑応答

高橋委員 コロナの影響による遊漁料収入の減少は、具体的にどのくらいか。

斎藤班長 サクラマスについては、解禁日の４月１日時点で緊急事態宣言が出ていたため、外出の自粛等により遊漁者が減少すると心配された。例年であれば年間１,５００万円程度の収入があるが、本年度はその３分の２となる１,０００万円程度の見通しとなっている。

アユについては、７月に解禁となったが、例年であれば約３,０００万円の収入のところ、本年度は約９割にとどまる見通しとなっている。

高橋委員 目指す成果の「拠点漁港における陸揚岸壁の耐震・耐津波化の整備延長」について、単位がよく分からない。

渡辺班長 単位は、メートルである。

小野委員 コロナ対策として取締船にリモート通信装置を導入したことにより、人員が削減されたのか。

橋本主査 人員が削減されたということではなく、通信機器を備えたことにより、画像を送れるようにして、取締員が漁業者と直接話したり、県庁に来て報告したりする機会を少なくした。

○議事（３）を説明した後の質疑応答

加賀谷委員 水産物オンライン販売事業について聞きたい。最近、ネット販売に取り組んでいる漁業者がいるのは聞いているが、漁協としては、販売手数料をいただいて運営している関係上、産地市場を通さずに販売されると困ることになる。その辺のルールづくりをしっかりとしてほしいが、どう考えているか。

柳原技師 事業を行うに当たっては、オンライン販売を行った漁獲物を漁協に報告する規定を設けたいと考えている。

加賀谷委員 そういったルールを作ってもらえるのであれば、大変いいことだと思うので、ぜひ進めてもらいたい。

小玉委員 ガザミやキジハタについて、どういった魚介類なのか教えてほしい。

水谷室長 ガザミは、ワタリガニと呼ばれるカニである。キジハタは、南の方に多く生息する魚だが、海水温の上昇で本県でも最近よく目立つようになった。非常に美味しくて高価であり、岩場に定着することから、県ではもっと増やそうと取り組んでいる。地域によっては、アコウと呼ぶところもある。

小玉委員 県として力を入れて取り組んでいるのか。

水谷室長 新しい栽培漁業施設を整備したのは、キジハタ種苗を放流して増やすといったことも理由の一つになっている。

- 栗盛委員 トヤマエビがボタンエビであると、資料を見て分かった。アカモクと書かれているが、一般的にはギバサだと思う。一般の人向けの会議資料は、分かりやすい名称にするか、カッコ書きで一般名称を記載してほしい。
- 水谷室長 御指摘のとおりだと思う。予算などの資料を流用しているため、正式名称となっているが、今後は分かりやすい名称に修正したものを用意する。
- 小玉委員 水産で種苗という言葉に馴染みがないが、どういったものを言うのか。
- 水谷室長 種苗と言うと、野菜の苗をイメージすると思うが、水産でも使う言葉である。海に放流するために人工的につくった稚魚のことを種苗と呼んでいる。
- 小玉委員 水槽の中で育てるのか。
- 水谷室長 そのとおり。親の魚から卵を採取して、ふ化させて、ある程度の大きさまで育てている。
- 小玉委員 キジハタについて、どの資料を見ても大きさが書いていない。どのくらいの大きさなのか。
- 水谷室長 最大で 50 センチ。通常で 30 センチから 40 センチ。
- 小野委員 サクラマスの飼料に、果物の廃棄物などを活用しているか。行われていないとすれば、今後活用の予定はあるか教えてほしい。山梨県では、内水面養殖でワインの絞りかすを使用しているとのことである。
- 水谷室長 残念ながら取り組んでいないし、取り組む予定もない。地域によっては、ワインの残渣やオリーブ、柑橘類などを餌に取り入れるところがあるが、秋田県には大規模な養殖業者がいない。まずは第一段階として、大型のマス、御当地サーモンのようなものを作ろうと取り組んでいるところであり、餌についてはその次の段階になると考えている。
- 栗盛委員 ギバサを食べるようになったのは秋田が最初だと思うが、最近スーパーで見るのは、新潟など他県産がほとんどのような気がする。秋田のギバサは、加工用となっているのか。
- また、ギバサの生産拡大に取り組んでいるようだが、成果は上がっているのか。
- 水谷室長 スーパーでは、新潟産や宮城産をよく見かけると思う。同じギバサでも、地域によって性質が異なり、秋田のギバサは 5～6 月が食べ頃であるが、新潟や富山は 2～3 月である。どうしても早く出回るものが目立ってしまう。秋田産のギバサは加工用となっているので、生で出回るものは少ない。駅や空港などで販売されている加工品は秋田産である。
- 生産拡大については、養殖技術開発を行っており、技術は概ね出来上がっていることから、どうやって広めていくかを進めているところである。
- 栗盛委員 機能性食品として健康にもいいと注目されているので、がんばってほしい。
- 柳原委員 秋田オリジナルワカメの成果は、その後どうなったか。

- 水谷室長 研究は続けている。秋田オリジナルワカメは美味しいが、従来のナンブ系より収量が少ないというのが欠点であった。それを改良して、ナンブ系の7～8割相当まで収穫できるようにした。試験的に栽培したものを一部のスーパーで販売している。他県産のワカメが出回る時期と重なってしまうため、差別化して高い値段で販売することが難しい。
- 栗盛委員 「あきたの魚 空の旅」といったPRをしていたと思うが、その効果はどうだったのか。
- 三浦班長 海づくり大会のPRを兼ねて、本県の地魚をJALの機内誌で紹介したほか、国際線で映像を流した。直接的な問い合わせ等はないが、イベントで県民にアンケートを行ったところ、以前に比べて地魚を知るようになった、関心が高まったという回答が得られた。県外の方、海外の方の反応については、リサーチしておらず把握できていない。
- 森田会長 よく釣れるアユというのは、人為的につくることができるのか。
- 水谷室長 アユは、友釣りという特殊な方法で釣る。縄張りを守ろうとするアユに、おとりアユを近づけて、攻撃をさせて針に引っ掛ける。よく釣れるアユというのは、攻撃性が高い、気性の荒いアユのことであり、野性味の強いものである。
- 森田会長 技術的に攻撃性の高いアユをつくり出すことができるのか。
- 水谷室長 親から卵を採ってふ化させて育てて、それを親にして、というのを繰り返していると、家畜化してしまう。そこで、天然のアユを親にして、放流する稚魚は2～3代までしか使わないようにしている。品種改良を行う訳ではない。
- 森田会長 要するに、飼い慣らされていない自然に近いアユを放流するということと理解した。
- 山本委員 底びき船の船上で漁獲情報をデータ化する試験については、私が最初に協力した。オンラインで漁獲物を販売しているが、データだけでは消費者に伝わらないので、船にカメラを付けたらどうかと思っている。SNSやYouTubeで、何が獲れているかをライブで流す。それを見て買いたい人がいたら、その日のうちに出荷して、漁協にはきちんと報告するようにする。そうしたら日本で最速の販売システムができるのではないかと思います。カメラを漁船に付けるようなかたちにしてはどうかと提案する。
- 水谷室長 まずは御協力に感謝する。ネットワーク関係の技術は日々進歩しており、可能性はどこまでも広がると考えている。漁業者に役立つものが第一と考え、漁獲データを集めるところから開始した。その先は売り方ということで、荷さばき所の静止画を公開しているところが、それだけでは分かりづらいという意見もあるので、様々なアイディアをいただきながら、漁業者や消費者に役立つシステムに改良していきたいと考えている。
- 森田会長 ICT技術が今後どのくらい進化していくのかは解らないが、最先端技術を

色々な分野に活用することは大切なので、そういった部分をぜひ研究してほしい。最初に行うことによる先発の利は大きいので、ぜひ願います。

○議事（４）を説明した後の質疑応答

阿部委員 洋上風力発電を本荘沖の漁場周辺に建設するという話を聞くが、その対応は今後どうなるのか。2028年あたりに稼働する予定とのことだが、魚種や水揚げが変化するのか教えてほしい。

斎藤班長 現在、由利本荘市沖で実施する業者を公募しているところである。エリアは決まっているが、その中のどの場所に建設するかは今後決まることになる。支援策で整備する魚礁の位置についても、今後、由利本荘市、漁協、県で詰めていく。

阿部委員 まだ分からないということか。

斎藤班長 実際に決まった話ではない。

阿部委員 11月ころ、具体的に決まるのか。

斎藤班長 募集期間が5月までとなっており、審査期間を経て11月ころに業者が決まる。その後、具体的な風車の位置などが決まる予定となっている。

森田会長 少し補足すると、八峰町沖と能代市沖では、再エネ海域利用法に基づき、促進区域（風車を建ててもよい区域）について、法定協議会で議論している。法では、漁業に影響を与えるところに風車を建ててはいけないことになっていることから、法定協議会で漁業に影響がないエリアを検討しているところである。

由利本荘市沖については、既に促進区域が決定しており、複数の業者が申請している状況にあるが、今後、その中の1業者だけが選ばれるので、その後で、どう進めるかを漁業者や自治体と相談しながら決めていくことになる。

加賀谷委員 海底耕耘を来年度から5年間継続していただき感謝する。今まで5年間実施してきて、水深80mから100mで実施したところでは、アマダイの漁獲量が大幅にアップした。漕ぎさし網や延縄の漁獲量が飛躍的に増えた。海底耕耘のおかげと考えており、感謝する。

高橋委員 資源管理を目的とした底びき網の改良漁具のイラストについてだが、目合を7節から10節に替えているように見える。これだと目合が細くなるのではないか。

松山主任 実際には、目合を広げて小さい魚を逃がすということである。7節の網に取り替えられるという意味で、このような矢印の向きとした。誤解を招くような表現となってしまった。

高橋委員 海底耕耘で、カレイ類やエビに効果があるのは理解できるが、マダラやホッケ、サメに影響があるのはなぜか。

松山主任 海底耕耘を行う場所の多くは、ヘドロが溜まっており、底びき網で曳けないような海底となっている。そのような海底では、栄養塩類が多分に含まれており、耕すことによって栄養塩が海中に溶け出す。それにより植物プランクトンがまず増え、それに伴ってそれを食べる動物プランクトンが増え、更にそれを食べる魚が増えるといった連鎖が起こる。したがって、底近くに生息する生物だけでなく、魚類などにも広く影響を及ぼすと考えられている。

高橋委員 イカが不漁となっているが、その原因は、温暖化によるものなのか、それとも中国漁船によるものなのか、見解を教えてほしい。

水谷室長 スルメイカについては、本県でそれを主体に獲っている漁船がないこともあって、今は県で詳細の調査を行っておらず、国の研究機関からの情報だけとなっている。資源が少ないこと、外国船の乱獲があるということは把握しているが、それ以上のことは把握していない。

森田会長 イカが函館で獲れず、稚内で豊漁だったという話も聞くので、温暖化の影響もあるのかなと思う。専門的なことは分からないが。

小玉委員 耕耘機の図の文字が小さすぎて読めない。

松山主任 耕耘機の寸法を示している。数字が記載されている。

○議事（５）を説明した後の質疑応答

小玉委員 消費者代表として、安全対策については一番関心があることなので、海洋生物毒の監視を今後も進めていただきたい。

○議事（６）を説明した後の質疑応答・・・質疑なし

○その他

- ・事務局から現委員の任期終了に伴う新たな委員の選任時期等について説明

以上